

変わるか？ ——戦争と暴力への視点——

文学研究科 田村 均

1. はじめに —— ヒトの生活形式

所有と性と暴力は、私たちの生活形式を作り上げている根本の原理です。ヒトは、オスとメス、成人と幼児が、多数入り混じった群れを作って生活する習性をもっています。こういう群れを、普通、ヒトの社会と呼びますが、メンバーが数十人規模の部族社会にせよ、数千万人を越える市民社会にせよ、社会生活は、行動様式上の決まりを守ることによってはじめで成り立ちます。ヒト社会の決まりは、多種多様に見えます。しかし、私の考えでは、本当に大事な決まりは次の三種類にまとめられると思います。

第一のものは、モノとヒトとの結びつきについての決まりです。平たく言えば、誰のものか、を決める規則です。どんな社会にも、他人のモノを奪ったり破壊したりすることを禁じる暗黙の合意があります。いかに嫉の悪い子どもでも、他人の皿に載っている食べ物を無断でとって食べたりはしないものです。この点、ヒト社会がどれほど厳しくメンバーを統制しているか、考えてみると恐ろしいほどです。

ヒト以外の動物でも、食べ物やなわばりの占有と、その占有をめぐる争いは、数多く観察されています。実のところ、他人の持ち物を奪ってはいけないと言うよりも、逆に、自分が勝手に使えないモノの持ち主こそ「他なるもの」なのだ、と言った方がよいのかもしれません。モノとヒトの結びつきをめぐる、私たちは「他人」に出会うのです。かくして、ヒトが協力して社会生活を送るためには、誰が誰のものかを決めた上で、他人からモノを譲ってもらったり、他人にモノを与えたり、他人とモノを交換したり分配したりするためのこみ入った規則が必要になります。これらを、所有についての規則、と呼ぶことができます。

第二のものは、ヒトとヒトの性的結びつきについての決まりです。あけすけに言えば、誰と誰が寝てよいか、を決める規則です。この規則の中にも、親子間の近親相姦の排除のように、ヒト社会だけでなくサルやエイブ（類人猿）の間でも成立している生物学的な法則があります。他方、ヒト社会に普遍的に見られる結婚という制度は、性交可能な個体ペアを厳格に指定し、生まれた子の養育の義務をペアの双方に与える、というヒト独特の社会制度です。

結婚制度はヒトの繁殖のために特別の役割を果たしています。ヒトの場合、子どもの養育には、両親の長期にわたる献身が必要です。たとえば、生活資源の獲得に不利な授乳期のメスに対しては、オスが十分な資源を供給するよう仕向けておかねばなりません。このために

は、1オスと1メスの排他的な性的結合の維持が不可欠になります。その一番自然なやり方は、雌雄ペアの空間的な隔離でしょう。ところが、狩猟や採集や農耕などヒト特有の生産活動のためには、潜在的に性交可能な多数のオスとメスが入り混じって共同生活を営まねばなりません。ペアの排他的結合を維持しつつ、同時に、多人数で共同生活する、というヒトの特異な生活形式が、結婚制度を、すなわちペアの社会的な隔離のための複雑な規則を要請するのです。これらは、性についての規則と呼べるでしょう。

第三に来るのは、所有の規則と性の規則を破ったとき、どのような罰を与えるか、という規則です。所有地に許可なく立ち入る、といった単純な所有権侵害については、現場での暴力的対処が認められる場合がありますし、性的関係における規則違反については、個人的な復讐が、少なくとも心理的にはある程度容認されたりもします。所有の規則と性の規則は、暴力という窮極の手段を使っても擁護しなければならない社会制度のカナメであることは間違いないようです。

もちろん、現代社会では、一般人の暴力行使が認められることはまれで、裁判に訴えて規則違反への制裁を求めるのが正式なやり方です。しかし、その裁判制度も、最後の最後のところでは、警察や軍隊の暴力によって維持されています。処罰一般を潜在的な暴力と見なしてよければ、正しい暴力の振るい方についての規則が私たちには必要なのです。このように、ヒトの社会生活の安定のためには、所有の規則と性の規則に加えて、暴力の規則が欠かせません。

所有については、経済学、法学、哲学、歴史学などの学問がそれぞれ詳しい研究を積み重ねてきました。性についても、生物学、医学、人類学、社会学など、さまざまな方向からの考察が可能です。しかし、暴力は、ヒト社会の基本的な装置の一つであるにもかかわらず、これを主たる研究対象とする学問は、今のところ見あたりません。

暴力は悪だ、とか、暴力ハンタイ、というような決まり切った文句は私たちの口から簡単に出てきますが、本当のところでは、私たちは、正しい暴力を必要としています。暴力は、忌み嫌われながら、求められる、という逆説的な現れ方をするわけです。こういう現象を正当に取り扱うことは、実は、なかなか難しい。私たちの中に、こういう現象を考えないようにさせる何らかの禁忌や忌避の意識が潜んでいるからでしょう。暴力に関しては、定説はおろか、学問的な方法論も必ずしも確立されてはいないと思います。そこで、これから、正しい暴力が出現するに到るまでの暴力のありようをめぐって、私の心に浮かんできた思考の道筋を、あまり実証性にはこだわらずに自由にお話することにします。

2. ケンカと戦争

所有と性の規則違反が正しい暴力によって制裁されると言うなら、暴力そのものは、正し

い暴力に先だって存在していることになります。暴力そのものは、ヒト社会において、どのような場面で生じてくるのでしょうか。暴力のありふれた現れはケンカや戦争です。また、暴力の窮極の形式は殺すことです。戦争は集団で行なう組織だった殺人ですし、一対一のケンカもときに殺人をとまいません。ケンカという暴力、戦争という暴力、処罰という正しい暴力、の三つはどのように関係しているのでしょうか。

典型的なケンカは、面子をめぐる男同士の対立から起こるもののようです。そして、人殺しの動機も、男が自分の名誉をひどく傷つけられたといういたたまれない感じにある場合がかなり多いようです¹。見知らぬ人物による強盗殺人や、家庭内のこみ入った諍いよりも、男同士の酒場での一見ささいな口論から殺しに発展するケースの方が多いらしいということは、少し驚かされる事実です²。「一般的に、殺人率が高いところではどこでも、口論が重要な割合を占めており、その結果、世界中の殺人の相当な部分は口論から起こっているに違いないということになる³」らしいのです。つまらない意地の張り合いから起こる偶発的な殺人は、新聞のベタ記事になる程度で、人々の注意を引きはしませんが、入念に計画された殺人よりも典型的な暴力現象のようです。

男たちが意地を張り合うのは、競争者を蹴落として自分の地位を守るためです。大抵の社会で、男は、おどしに屈しやすいと思われたり、侮辱されてもやり返せなかったりするならば、決定的に仲間内の序列を落としてしまいます。オスにとって、社会的地位が高いほど、メスを得るのに有利であることは明らかです。「もしも、社会的地位がつねに繁殖成功に寄与しており、社会的地位には、暴力をどのようにコントロールするかの能力がつねに寄与していたのだとすれば、暴力のスキルが淘汰上有利であったことは、否めない⁴」わけです。簡単に言えば、ケンカに勝ち残る個体ほど、子孫を多く残す確率が高くなる。これが100万年単位で計られる長期的な繁殖上の事実ならば、ヒトのオスが仲間内での序列争いから暴力に到る傾向をかなりもっていることに不思議はありません。

殺しにまで到る同種個体間の暴力的対立は、ヒトに特有の現象などではありません。かつて動物行動学者のコンラート・ローレンツは、同種他個体の殺傷を抑制する生得的なメカニズムが、オオカミやライオンなどの大型捕食獣をはじめ、多くの動物に備わっている、と主張しました⁵。しかし、その後の観察でこの主張は否定されました。ライオンの群れは自分たちのなわばりに侵入してきた他のライオンを殺すことがありますし、チンパンジーの群れ

¹ 1972年のデトロイト市において結審した親族間以外の社会的対立による212件の殺人のうち、101件が、何らかの意味で「顔」をつぶされた男が別の男を殺したものでした（ウィルソン&デイリー『人が人を殺すとき』新思索社1999, 281）。

² 1948-1952年のフィラデルフィア市における殺人事件中、35パーセントが「ささいなことに起因する口論、侮辱、呪い言葉、押し問答」から起こりました。ウィルソン&デイリー1999, 278。

³ ウィルソン&デイリー1999, 205-206。

⁴ ウィルソン&デイリー1999, 219。

⁵ コンラート・ローレンツ『攻撃 悪の自然誌』みすず書房1970, 183。

がなわばりをめぐって抗争を繰り返し、隣接グループを全滅させてしまった例が知られています⁶。「多くの哺乳類において、同種他個体からの攻撃は主要な死因であることがわかった⁷」とさえ言われています。

チンパンジーのなわばり争いは、ヒトで言えば男同士の優劣争いよりむしろ部族間戦争によく似ています。チンパンジーのオスがグループ内での優劣序列をめぐって争うことはよく知られていますが⁸、明らかに殺そうという意図をもって他の個体を襲う事例は、隣接する群れのメンバーを攻撃するときに限られるようです⁹。チンパンジーのオスは、数頭連れだつてなわばりの見回りをします。ときに境界を越えて他の群れの領域に侵入し、隣接する群れの個体が単独ないし少数にいる場面に遭遇すると、仲間内では絶対に行なわないような徹底した暴力を振るって死に到らしめる、ということが観察されています。オスはもとより、子連れのメスも容赦ない暴行を加えられ、母が殺され子が食べられる、といった事例も稀ではありません。比較的穏やかな扱いを受けるのは、若い未經産のメスだけで、攻撃者はむしろ若いメスを自分たちの群れに誘い込もうとします¹⁰。

ヒトの部族間戦争については、南アメリカのヤノマモ族の例がよく調べられています。ヤノマモ族の間では、ちょっとした言いがかりや口論から小競り合いが発生して村同士の戦いに発展したり、違う村同士の男が女を間にして争ううちにそれが高じて侵入攻撃が行なわれたり、といった仕方、戦争や侵入グループによる襲撃殺人や女の誘拐がしょっちゅう生じていると言われます。チンパンジーと違うのは、手の込んだだまし討ちが行なわれたり、弓矢などの武器が用いられたりするところです。よそ者嫌いは、ヒトとチンパンジーに共通する顕著な心理的特性です¹¹。いずれの場合も、仲間ではない相手に対する暴力行為は、凄惨なものになります。ヤノマモ族の男性の約30パーセントは暴力で命を落とすと推定されています¹²。また、ニューギニア高地人は、1938年にアメリカの探検隊に接触するまでは石器時代そのままの暮らしを続けていたのですが、彼らの生活空間では、隣接部族はいつも危険な敵であり、よそ者は見つければ殺すべき存在だったようです¹³。新石器時代の遺構がしばしば要塞化されていることから分かるように、部族社会は平和な理想郷などではなく、現代よりも暴力的で危険な社会だったのです¹⁴。

⁶ ジェーン・グドール『野生チンパンジーの世界』ミネルヴァ書房1990, 499-543

⁷ ウィルソン&デイリー1999, 236

⁸ グドール1990, 426ff.

⁹ グドール1990, 539.

¹⁰ グドール1990, 499-543

¹¹ 「チンパンジーは生まれつきよそ者を嫌うとしかいいようがない」グドール1990, 533.

¹² リチャード・ランガム&デイル・ピーターソン『男の凶暴性はどこからきたか』三田出版会1998, 95ff.

¹³ J. ダイヤモンド『人間はどこまでチンパンジーか』長谷川真理子・長谷川寿一訳、新曜社1993, 333-334

¹⁴ 大方の予想に反して、現代人は、殺人で死ぬ確率が部族社会の住人や狩猟採集民よりも低いのです。また、イギリスにおける殺人率はこの数世紀にわたって急降下しています。現代は昔より暴力的でない社会のようです。ウィルソン&デイリー1999, 465.

仲間内での序列争いから殺人に到ることは、実際はごく稀にしか起こりません。殺人に到らないケンカの方が圧倒的に多いでしょう。他方、戦争は、つねに仲間外の相手の殺害を目的として遂行されます。ヒトの場合も、チンパンジー同様、仲間内と仲間外とでは暴力の現象形態がまったく違います。しかし、これらの暴力現象と、処罰として現れる正しい暴力との関係は、まだ見えてきません。実は、ヒトの活動には、もう一つ、殺しを目標とした重要な暴力の現象形態があります。それは、狩りにおける動物殺しです。この問題を取り上げて考えてみましょう。

3. 狩りと肉食

「ヒトは狩人であった (Man the Hunter)」という考え方は、更新世¹⁵のヒトの進化を説明するものとしてかつて注目を集めました¹⁶。しかし、その後いろいろな反証が出され、この考え方は説得力を失います。まず、初期人類の狩猟遺物であると思われていた骨の堆積が、じつはヒョウの仕留めた獲物の骨であることが分かりました。また、初期人類は、有能な狩人というより大型捕食獣の食べ残しをあさる屍肉あさり屋 (scavenger) だったらしいことも明らかになってきました。そして、狩猟重視に潜んでいる男性中心主義がフェミニストから批判され、あわせて人類一般における植物食の重要性が再認識されて、ヒトの進化を狩猟への適応の成功から説明する試みは廃れたのです¹⁷。

一方、同じころ進められていたチンパンジーの野外観察から、彼らもまた肉食を特別に好み、狩りをしばしば行なうという事実が明らかになってきました。チンパンジーでもおとなのオスが狩りをすることが多いのですが、おとなのメスも狩りをします。彼らは、単独で動物の捕獲に成功することもあります。協同して獲物を追いつめることもよくあるようです。獲物は、アカコロブス [サルの一種]、ヤブイノシシ、ブッシュバック [ヤギシカ]、ヒヒなどの主に子どもか赤ん坊で、共食いの例もないわけではなく、また、ヒトの赤ん坊を襲った例も報告されています¹⁸。殺しの実行はチンパンジーたちに激しい興奮をもたらします¹⁹。獲物の所持をめぐる争いが起こったり、肉の分配をめぐる複雑な社会的関係があらわになったりする点で、狩りと肉食はチンパンジーにとって大きな意義をもつようです²⁰。狩猟は、

¹⁵ 約200万年～1万年前。洪積世と同義。

¹⁶ 1950年代から1960年代にかけて有力だった説。1966年には狩猟採集民に関する人類学者の会議がシカゴで行なわれ、典型的な Man the Hunter 説が、ウォッシュバーンとランカスターによって唱えられました。マット・カートミル『人はなぜ殺すか 狩猟仮説と動物観の文明史』内田亮子訳 新曜社1995, 12ff.

¹⁷ マット・カートミル1995, 1-42およびイアン・タッタソール『化石から知るヒトの進化』河合信和訳 三田出版会1998, 319-341。なお、現在では、Craig B. Stanford, *The Hunting Apes*, Princeton Univ. Press 1999 が、Man the Hunter 説の復権を試みています。

¹⁸ グドール1990, 273-324

¹⁹ グドール1990, 273. Craig 1999, 65.

²⁰ 「狩りの終わりは、しばしば、他の社会的相互交渉の領域全体の始まりにすぎない。(Craig 1999, 66.)」

ヒトだけの特性などではなく、おそらくヒトとチンパンジーの共通の祖先に由来する活動なのでしょう²¹。

しかし、現代の狩猟民に関する報告と、チンパンジーの狩猟の報告とを読み比べてみると、少なくとも一つ、著しい違いがあることにいやおうなしに気づきます。それは、チンパンジーの場合、殺される獲物への感情移入がまったく欠けているように見える、ということです。次のような報告を読むと、私の言いたいことがはっきりするでしょう。

「生後10カ月のある子ザルは、単独のおとな雄によって食べられたのだが、捕獲されてからも40分間にわたって生き続け、か細い声で助けを呼んでいた。3頭のヤブイノシシの大きな子どもは、ゆっくりと引きちぎられたために死ぬまでに11~23分かかった。その中の最大のイノシシは、ハンフリー〔雄チンパンジーの名前〕が心臓を引き抜いた時に最後の悲鳴をあげた。』²²

チンパンジーの狩猟の報告は、こういうぞっとするようなエピソードに満ちています。彼らをホモ・サピエンスの規準で非難してもはじまりませんが、私たちの多くはこのような殺し方を好まないでしょう。肉を食べたいとしても、動物を不必要に苦しませずに一気に殺すべきだ、と考える人が多いはずです。チンパンジーは、他の個体が世界をどう見ているとか、何を感じているかを理解できますし、他個体への感情移入の能力も持っています²³。しかし、じわじわと死んでゆく獲物の苦痛への想像力をもたないように見えます²⁴。

これに対し、ホモ・サピエンスの狩人たちは、動物を殺すことに何となく罪悪感をおぼえるもののようです²⁵。たとえば、シベリアの狩猟民は、動物を殺す前にそれに向かって言いわけをする、ということが報告されています。動物を殺す行為は宿命や精霊によって強いられる避けられないことであり、むしろ殺される動物の方もそれを望んでいるはずのこととして説明されます。「おまえの方からやってきたんだ、かわいそうに。だから私をうらむなよ」といった呼びかけをするわけです。動物の殺害は、「みずから望んで殺されることを求めて

²¹ ヒトの祖先とチンパンジーの祖先が共通の系統から分岐したのは、約600万年~800万年前と推定されています。ダイヤモンド1993, 33.

²² グドール1990, 297.

²³ グドール1990, 392ff.

²⁴ 人類は、拷問具を発明したりする才にも恵まれていますから、チンパンジーよりたちが悪いとも言えます。他の生き物を苦しめて喜ぶのも、それを嫌悪するのも、いずれも他者の苦痛をありありと想像できる能力の現れです。チンパンジーとヒトの違いとして想定したいことは、この能力に二種間で差があるように見える、ということだけです。どちらがたちが悪いかがということが問題なのではありません。

²⁵ 肉食主義は、この心性に訴えかけているのでしょう。

きた、殺される動物の側の自己犠牲として説明される²⁶」のです。²⁷

この不可解な態度の背後には、狩猟民と動物との強い心理的つながりの意識があります。現代のスポーツハンターとは違って、伝統的な狩猟民は、動物を自分たちと同類の存在と考えます。各地の変身譚などにもこのことはいかがええます。人が動物に、動物が人に姿を変えるのは、「一つの世界から別の世界への移行はあっても、動物と人間の違いはない²⁸」からです。「ある存在はここでは人の顔をしているが、あそこでは動物の顔をして、という具合に、同時に二つの世界に投影され²⁹」ても不思議はないのです。伝統的な狩猟具によるかぎり、人間の方が動物より圧倒的に優位だというわけではありません。そして、狩猟民の生活環境では、人間の方が動物に寄り添い、動物のもたらししてくれる資源に頼って暮らしています。動物と人が仲間意識で結びつく素地は十分あるわけです。

だから、動物を殺すときに言いわけをするのは、そんな仲間を殺して利用する以上、相手と和解しておかなければ相手の身内の復讐が恐ろしいからなのです³⁰。自己犠牲という概念で動物の死が説明されるのも、殺害の罪責を免れるために、死を相手の自発性に由来するものとして言いくるめる心理的な詐術を表しています。そしてもちろん、そこには、進んで身を差し出してくれた相手への感謝の気持ちも込められています。

シベリアの狩猟民だけでなく、アフリカのレレ族でも、動物殺しにかかわる自己犠牲という概念操作が見られます³¹。レレ族では、センザンコウが特別の意味をになう動物として扱われるのですが、センザンコウは、「人間の友であり、動物界において人間を隠喩的に代表するもの³²」とされます。「もしそれが狩人に捕らえられるならば、……それは自らの意志で自分を差し出すのだと考えられている。³³」センザンコウを食べることは、一種の犠牲儀礼〔sacrifice供犠〕なのであり、「この特殊な供犠の、自らの意志で犠牲となるものは自然の精霊たちの代表なのである。³⁴」

ヒトの狩猟をチンパンジーの狩猟から分けているのは、どうやら道具の有効利用や協同性と計画性の向上といった現実的な相違ではなさそうです。真の相違は、ヒトにとっては動物

²⁶ E. ロット-ファルク『シベリアの狩猟儀礼』田中克彦・糟谷啓介・林正寛訳 弘文堂1980, 143.

²⁷ 宮沢賢治の「なめとこ山の熊」は、このような心性を不気味なほど正確になぞった不思議な童話として記憶にとどめられてよいでしょう。田村 均「自己犠牲をめぐる三つの物語——エウリピデス、ティム・オブライエン、宮沢賢治——」『名古屋大学文学部研究論集 哲学45』1999, 37-71参照。

²⁸ ロット-ファルク1980, 16.

²⁹ ロット-ファルク1980, 14.

³⁰ ロット-ファルク1980, 141.

³¹ 自己犠牲は、多くの宗教や道徳的教訓の根本にあります。たとえば、福音書にあるイエス・キリストの生涯がそうであり、ジャータカに見える釈尊前世の「捨身飼虎」譚も自己犠牲物語です。また、供犠の儀礼が宗教活動の中心になっていることはよくあります。犠牲および自己犠牲は、ヒトの世界了解のカナメに位置する概念の一つであると思われます。

³² リュック・ドウ・ウーシュ『アフリカの供犠』浜本満・浜本まり子訳 みすず書房1998, 40.

³³ リュック・ドウ・ウーシュ1998, 40.

³⁴ リュック・ドウ・ウーシュ1998, 50.

殺しが罪悪と感じられるゆえに³⁵、その行為を正当化するための概念操作が必要となる、という心理的側面にあると思われまゝ。精霊たちによって成り立っている宇宙的秩序の中で、死すべきものが自らの身を差し出して死に、他のものたちは感謝の念をもってそれを受け入れる、という形而上学的プロットの中に置かれてはじめて、動物殺しはヒトにとって心理的に耐えられる行ないとなります³⁶。自分たちを取りまく全宇宙の成り立ちを想像し、その中に自分の行ないを位置づけることによって、はじめて、ヒトは自分の行ないを自分のものとして引き受け、自分自身と和解できるようになる、そう言ってよいでしょう³⁷。そういうほとんど逆説的な心理を、ヒトは進化の途上で身につけたのです。

こうして、私たちは、仲間殺しとしての動物殺しをめぐる、暴力の正当化の仕組みを一つ見つけたこととなります。生と死をつかさどる宇宙的秩序の下で、死すべきものと生きるべきものが分かたれ、対等な仲間同士の間、生と死が不均衡に分配されます。正しい暴力は、ケンカや戦争から自然現象のように浮かび上がるものではなく、生死の秩序と結びついた概念上の操作に由来するわけです。しかし依然、処罰としての正しい暴力は、見つかっていません。生死の秩序と犠牲という領域をもう少し探究する必要があるようです。

4. 狩りから供犠まで

犠牲儀礼は、諸民族、諸宗教のそれぞれに固有の多種多様な構成をとっており、犠牲とはそもそも何なのか、という定義さえ必ずしも固まってはいません³⁸。最低限の共通要素は、家畜ないし人間が殺害されるタイプの儀式が犠牲儀礼なのだ、ということぐらいでしょう³⁹。羊や山羊の家畜化は、紀元前7000年紀半ば頃、まず殺して肉を得るために始まりました⁴⁰。それ以前からあったはずの、狩りにおける獲物の自己犠牲の物語から、家畜を殺す儀礼に到るまでの、犠牲概念の変容と成長過程を、想像をまじえて考えてみます。

狩猟は動物殺しですが、宗教儀礼ではありません⁴¹。原始の段階では、自己犠牲という概

³⁵ ローレンツは、「もし野獣を歯や指の爪で殺さなければならぬとしたら、人はウサギ狩りにだっただけで行かなくなるだろう（ローレンツ1970, 331）」と指摘しました。ローレンツ流の群淘汰の考え方は現代進化論によって否定されたようですが、ヒトに生得の心理的殺害抑制機構があるという指摘まで間違いということはないはずです。

³⁶ ユダヤ教、キリスト教、イスラム教、ヒンドゥ教、仏教といった宗教は、すべて、程度の差はあれ、動物殺しと食肉利用をめぐる規定や禁忌をもっています。これはただの偶然とは思われません。

³⁷ どんな利益にも結びつかない哲学という活動が、それでもなお現代人を惹きつけるのは、ヒトがもってしまったこの心性のせいでしょう。

³⁸ 犠牲をどう見るかの説としては、エドワード・タイラーの贈り物説、ウィリアム・ロバートソン・スミスとの交感説、アルフレート・ロウジの象徴説、ルネ・ジラルドのカタルシス説、などが代表的です。だが、どれも多種多様な犠牲事例のすべてをおおうことはできないでしょう。

³⁹ 動物殺しを犠牲儀礼の核心と見るべきであると明確に主張したのは、アンリ・ユベール&マルセル・モースの『供犠論』です。

⁴⁰ 搾乳の始まりは、紀元前5000年紀末と推定されます。谷泰『神・人・家畜—— 牧畜文化と聖書世界——』平凡社1997, 90-135参照。

⁴¹ しかし、たとえばシベリアの狩猟民には、殺し方や使ってよい武器の規定をはじめ、狩猟に出かける前の儀礼、帰ってからの儀礼、等々の多くの儀礼があります。ロット-ファルク1980参照

念も、森の中で遭遇した人と獣の利害対立を解消する心理的な仕掛けであって、生と死の宇宙的秩序に結びつけられてはいない、と仮定しましょう⁴²。この原始的な一対一の対峙関係では、力をもっている狩人の側が、自らの力の行使を正当化するため、自分にとって好都合な内容の自発性を、弱者である獲物の側に想定し、自分の罪悪感を打ち消しています。しかし面白いことに、狩人の側は、動物の側の自発性が虚構にすぎないことに薄々気づいており、だからこそ、本当は嫌だったのにもかかわらず死んでくれたという点で、動物に恩義を感じるのです。概念の水準で生と死を分かつのは、自ら死んでもいいと思った、という虚構だけです。この虚構が、事実の水準での一方的な暴力行使を、かろうじて隠蔽しています。

狩猟動物の自己犠牲は、レレ族のセンザンコウについて確認したように、しばしば自然の靈的秩序と結びついて、その秩序の名の下で生と死が安定的に意味づけられる、という構造をもちます。たとえば、アイヌのイヨマンテ（熊祭り）は、そのような構造を垣間見させてくれる祭りです。それは、動物の自己犠牲という、殺害現場での概念操作から、生と死の秩序がより構造化される段階に、一步近づいたものと考えられます。

イヨマンテは、森で捕らえた子グマを村で大事に育て、その後殺して森に送り返す祭りです。アイヌは、山に住む神々への和解と再生のメッセージを託すために、子グマを殺してその魂を山に送り返します。ここでは人と動物の一対一の対峙関係とは別の水準に、生と死をつかさどる神々の秩序が想定されています。とはいえ、アイヌの村落には宗教儀礼を行なう専門の神職は見られません⁴³。神々の秩序を仲介して支配する王はまだ登場していません。

神々の世界（カムイモシリ）と人の世界（アイヌモシリ）の間には照応と交流が成り立っていて、カムイである精霊はアイヌモシリに来るときにクマやフクロウの姿をとります⁴⁴。クマを殺すことは、カムイの魂をクマの肉体から解放してカムイの世界に帰らせてやることを意味します⁴⁵。イヨマンテで犠牲に供される子グマの魂は、村人によって大事に育てられたというメッセージを携えて森へ帰ります。アイヌの人々は、このような祝祭によって、神々の世界と人の世界のつながりを確認するわけです。

神と人の祝祭的な交流の場に、神々と特別に結びついて生死を左右する力を得たと称する者が現れれば、それが現世の王となり、人々を支配することになります。はるかな古代において、王はそのようなものとして成立したのかもしれませんが。

古典学者のブルケルトの考証によれば、ギリシア悲劇（トラゴーディア）は、繁殖力の低

⁴² 現実の狩猟民は、常に何か宗教をもっていたはずですから、ここで言う原始の段階は、論理的に推論して作った出発点にすぎません。要点は、一対一の対峙があるだけで、これを包み込む宇宙的秩序が想定されていない段階を考えておく、ということにあります。

⁴³ Kitagawa, Joseph, 'Ainu Bear Festival (IYOMANTE)', in *History of Religions*, Vol.1, no.1, 95-151, see 98.

⁴⁴ アイヌの場合も、カムイであるクマは狩られるために自ら進んでヒトの世界にやってくる、という自己犠牲の構造が前提されています。Kitagawa 1961, 140.

⁴⁵ Kitagawa 1961, 131, 140.

下した種雄山羊（トラゴス）を殺して生命力の新たな始まりを画す儀式から生まれた、とされます。家畜を殺すこの儀式が犠牲儀礼です。「犠牲とは儀式的な殺害であり、犠牲儀式において人は死をもたらす死を体験するのである。⁴⁶」この犠牲儀式の中で、自ら種雄山羊の命を奪う者として登場するのが、犠牲殺害者すなわち供犠の祭司としての王です。「一人の者がすべての者の上に立つ。それが、犠牲殺害者（the sacrificer）、家の者たちの父（pater familias）すなわち王（the king）である。王には生と死を可能にする力が宿っている。そして王は、その力を犠牲儀礼において証明するのである。実際にはもちろん、王には死を与える力しかないのだが、死を与えることを通じて、その裏返しとしての生を与える力を再び確立すると王は主張し、それを実現するように見えるのだ。⁴⁷」

図式化すると、仮定された原初の段階では、人と動物の一対一の関係があり、そこでは、人は、動物殺しの罪責におののきつつ、動物の自己犠牲に感謝し、それを悼む、という心理が成り立っています⁴⁸。アイヌの熊祭りから想定される段階では、人々の生活の場である自然環境と、神々の座である自然を超えた力の場とが、祝祭の中で、政治的支配を生じる以前のかたちで結びついています。そして、ブルケルトが描写する悲劇の誕生の段階では、多数の家畜を所有する王が、犠牲儀式を通じて生と死を支配する力を体現し、共同体に君臨しています。こうして、生き物が互いに殺し合う自然状態は、生と死を支配する力の介在によって、死すべきものが死に、生きるべきものが生きる、という宇宙的必然性の中に取り込まれることとなります。ここまで来ると、処罰としての正しい暴力も、生と死を支配する王の力が発現するもう一つのかたち、として説明できそうです。しかし、王の力の現れ方も決して単純明快ではありません。名高いギリシア悲劇を通じてそれを見てみましょう。

5. 供犠と処罰

ソポクレスの『オイディプス王』はギリシア悲劇の最高傑作として知られていますが、これはまた特異な犠牲譚でもあります。父殺しと母との近親相姦という大罪を我知らず犯してしまったオイディプス王は、罪深い我が身こそが自ら統治するテーバイに疫病の災いをもたらした穢れそのものであることが判ったとき、自分の目を突いて盲目となり、テーバイから追放されます。

二つもの大罪をオイディプスが我知らず犯してしまったのは、父たる先のテーバイ王ライオスの犯した過ちの報いがめぐりめぐって降りかかったゆえでした。ライオスは、汝が子を

⁴⁶ Burkert, Walter, 'Greek Tragedy and Sacrificial Ritual', *Greek, Roman and Byzantine Studies*, 1967, Vol.7, 87-121, see 106.

⁴⁷ Burkert 1967, 112.

⁴⁸ チンパンジーは殺しに興奮しますが、たぶん、おののかないのです。だから、殺しの正当化の概念装置も必要としないわけです。

もうければその子は父を殺し母と交わるであろう、というアポロンの神託に逆らって妻イオカステをはらませ、生まれた赤子は羊飼いに託して山中に棄てさせます。だが、赤子はコリントス王ポリュボスの牧人に救われ、オイディプスと名づけられてポリュボスの子として育ちます。

長じたオイディプスはふとしたことから「汝は父を殺し母と交わるであろう」というアポロンの神託を知り、実の父と信じて疑わぬポリュボスの王宮を出奔します。旅の途次、彼は、街道の辻で馬車に乗った見知らぬ男に遭遇し、争いの果てにその男と、一人を除く従者たち全員を殺します。旅を続けてテーバイに到ったオイディプスは、人々に災厄をもたらしていたスフィンクスの謎を解き、先王の後イオカステを娶ってテーバイの王となります。ところが街道で遭遇した見知らぬ男こそ、オイディプスの実父、先のテーバイ王ライオスだったのです。オイディプスは本当の事情を何も知らないまま、不吉な神託から逃れようと努力すればするほど神託を成就させることになっていたのです。

ソポクレスの劇は、オイディプス王の治下、疫病の流行に悩むテーバイ市民が、賢明なる王に再び救助をもとめる場面から始まります。オイディプスは進んでその懇願を受け、解決に乗り出すことを宣します。アポロンのお告げを占うと、テーバイの地には先王殺害の罪の穢れが巣くっていると知らされます。何も知らぬオイディプスは、先王殺害犯を共同体から追放することを宣言し、占い師のテイレシアスやイオカステの弟クレオンを疑って、激しい非難を投げつけあいます。

一方、イオカステはライオス王の死の次第を、ただ一人逃げ延びた従者から聞き知っていて、それをオイディプスに語ります。オイディプスは、自分が街道の辻で殺した男の死に様とライオスの死の次第が酷似していることに気づきます。そこへコリントス王ポリュボスの死の知らせが届きます。オイディプスは、いまだ実父と信じて疑わぬポリュボスの死の知らせを、神託が成就しなかったしるしと考えて喜びますが、コリントスからの使者は、その昔、赤子のオイディプスを救った牧人その人であり、オイディプスはポリュボスの実子ではないと告げます。オイディプスは、かつて赤子を託され山中に棄てに赴いたライオスの羊飼いを呼び出して問いつめ、ついにすべてを悟ります。「ああ、思いきや！すべては紛うかたなく果たされた。おお光よ、おん身を目にするのもはやこれまで——生まれるべからざる人から生まれ、まじわるべからざる人とまじわり、殺すべからざる人を殺したと知れた！ひとりの男が！⁴⁹」と叫んで、オイディプスは目を突き、テーバイを立ち去ります。

この物語は、ある面からは、共同体に災厄をもたらす元凶として名指された一人の男が、共同体から暴力的に追放されるいきさつとして解釈することができます。オイディプスは、

⁴⁹ ソポクレス『オイディプス王』藤沢令夫訳岩波文庫91。

王として、怒りをもって先王殺害犯の追放を宣言します。そしてテーバイの群衆はみなこぞってこの怒りに同調します。ここに災厄をもたらすとされた者が、暴行を受け共同体を追放される、という筋書きが現れます。ところが、こうしてかき立てられた怒りによって追放されるのは、オイディプスその人でした。この劇的なアイロニーは作劇上きわめて効果的ですが、それだけではなく、災厄をもたらす者の共同体からの追放というプロットを、自己犠牲の構造と接続しているとも言えます。したがって、オイディプス劇は、別の面では犠牲譚でもあるわけです⁵⁰。

オイディプスは、自らの宣言によって自らの追放を招きます。先王殺害犯を追放せよという命令は、実は自分自身を追放する命令だったのですが、オイディプスは、それを知りませんでした。オイディプスは、自らの抹殺に我知らず協力する存在であるという点で、我が身を差し出す狩りの獲物の自己犠牲と同じ枠組みに捕らえられています。狩りの獲物の場合は、その意志などとはまったく関係なく、端的に自己犠牲の物語を押しつけられました。罪悪感をうちやるために人間がこしらえた形而上学が、虚構の意志を仮託して動物を人間の餌食にする仕組みを作り上げます。その作用が、自己犠牲として発現していたわけです。

オイディプスの場合には、自らの意志の宣言が自らの抹殺に結びついてゆく止めようのない事実の推移が関わっています。ここには、自ら進んで行なうことが自らの望まぬことに転化して行く意志の逆説があります。オイディプス劇の主要な動機は、王の正義が個としてのオイディプスを抹殺するというかたちで、人間の意志が自らを裏切って行く過程なのです。すなわち、生と死を分配する正義の形而上学が、意志の逆説的な構造を経由して、個体を権力の餌食にする仕組みを産出しています。その作用が、処罰として発現するのです。

罰を与える力は、人の宿命を左右し生と死をつかさどる力であり、それは劇中では神々のものとして存在します。王たる者はその力を体現し、危機に陥った共同体を救うため、怒りをもって立ち上がります。先王殺害は、王の力を否定する秩序破壊であり、その侵犯行為が一切の条理を崩壊させ、テーバイの共同体は疫病による無数の死という無秩序に投げ込まれてしまっています。秩序の回復は、根本にある先王殺害の穢れを取り除くことによってしか果たされません。

真相においては、先王殺害という侵犯行為は、父殺しといういっそう原型的な罪でした。都市国家の秩序において生と死を支配する王を殺すことは、血縁の秩序において生命の根源である父の力を奪い取ることです⁵¹。そして、父を殺した者は、母との近親相姦という生命

⁵⁰ 自己犠牲と結びつけなくても、オイディプス劇を、別の観点から犠牲譚と見ることは可能です。疫病を招き寄せたのがオイディプスの穢れであるというのは、危機に陥った共同体のスケープゴート探しであるとも言えます。それならば、オイディプスは、スケープゴートとしての犠牲であることとなります。何かの身代わりになる、ということも「犠牲」という概念の大事な内容です。ルネ・ジラルール『暴力と聖なるもの』（法政大学出版局1982）第3章を参照のこと。

⁵¹ ルネ・ジラルール1982, 121-122.

の秩序を紊乱する大罪をも犯してしまっていました。言い換えれば、共同体の仲間内に、父を殺すことによって皆の生命を傷つけ、母を犯すことによって生命の秩序を侵犯する者が混じっていたわけです。これは、所有と性の規則の決定的な侵犯にはかなりません。災厄の元凶たる追放さるべき者とは、所有と性の規則を侵犯した事実によって、仲間内にありながら仲間であることができない存在だったのです。

仲間ではないよそ者たちを、心理的な咎めを覚えることなく無慈悲に襲撃して殺戮することが、戦争という暴力の特徴でした。動物殺しとしての狩りや供犠の特徴は、仲間である動物たちを利用するために、罪責におののきながら動物を殺し、その行ないを生と死の秩序の中に位置づけて心の安定を得る、ということでした。処罰という暴力は、戦争と狩りの交差する位置にあるように見えます。というのも、罰されるのは、仲間の内にいながら仲間であることができないような者だからです。処罰としての正しい暴力とは、人々が、仲間の内において仲間ではありえない者を、ある恐れとおののきを感じつつ、迫害し襲撃し抹殺すること、そしてこの行ないによって秩序を回復することである、と言えるようです。

処罰は、オイディプスが何も知らずに先王殺害犯を追放することを宣言したように、共同体の総意による迫害をとまいません。仲間内において仲間ではありえないものは、狩り出され、追い立てられ、打ち殺されるのです⁵²。迫害する群衆は真に恐ろしい存在です⁵³。大量殺戮兵器が開発されるまでは、地球上でもっとも恐ろしいものは、暴力を激発させるホモ・サピエンスの群れだったのではないかと思われまます。群れによる襲撃は、おそらく、動物としてのヒトの、戦争にも狩りにも共通する自然な攻撃行動です⁵⁴。

この自然な行動類型が、生と死の秩序という理念的な枠組みと接触する場面で、正当化されうる暴力行為が動き始めます。狩りの場合にも供犠の場合にも処罰の場合にも、追撃の犠牲者は、死ぬことによって共同体に善をもたらします。仲間である動物を狩り立てて殺しその肉を食べるといふ罪責は、生と死をつかさどる神々の教えによって、制限されたり認容されたりします。同様に、仲間の内にいながら仲間ではない者を狩り出して殺す、つまり、所有の規則と性の規則を侵犯した者を罰する、という戦慄すべき体験は、生と死を支配する神々の秩序によって、言い換えれば神々の力を体現する王の権力によって、共同体を守るための正しい行ないとして擁護されるのです。

かくして、処罰という正しい暴力は、共同体の力の秩序を志向する個体が、自らの意志の

⁵² 「石もて追う」ことは、狩りにおいても、また刑罰としても、非常に古い起源を持つように感じられます。チンパンジーが威嚇のために石を投げることも、まれではないと言われます。

⁵³ 迫害する群衆の恐ろしさは、たとえば、もう一つの典型的な犠牲譚であるエウリピデスの「アウリスのイーピゲネイア」において、イーピゲネイアの犠牲を強いる力として描き出されています。また、イエスの十字架への道行きも、群衆による迫害をとまなっていました。

⁵⁴ おそらくチンパンジーとヒトの共通の祖先に由来するのでしょうか。

逆説的な構造を通じて権力の餌食となる、というオイディプスの逆理の中に出現してきます。生きるために共同生活を必要とする個々のヒトは、共同性を志向するかぎり、或る面では個としての自分を抑圧することを避けられません。こうして、共同性を志向する個々のヒトの意志は、主体を裏切りうる構造をもつゆえに、共同性の侵犯に我知らず迷い込んだとき、個々のヒトは、共同体の名の下で迫害のために結集した群衆に、本人自身の意志の帰結として、襲撃されることとなります。これが処罰という正しい暴力の仕組みだったわけです。

6. むすび

私たちは、すこし風変わりな結論に導かれたようです。途中経過を端折って言えば、正しい暴力としての処罰は、ある意味で自分が自分に対して振るうものだ、ということになりました。ことさら逆説めかして言えば、正しい処罰はすべて自己処罰である、ということもできるでしょう。しかし、修辞に凝ると真相が見えなくなります。見かけが逆説的になってしまう理由をタネ明かしすれば、「自分」とか「自己」とかいうコトバがかなり中味の伸び縮みを許す特性をもっていて、「自分」と言いながら実は自分の所属集団や社会全体を指すこともできるし、また、「自分」と言って厳密に発話の時点でのその人自身だけを指していることもある、ということなのです。

私たちののは、しばしば自己分裂に悩みます。社会的な存在としての「自分たち」と、個的な生きる力としての個々のヒトの「自分自身」とは、ときに葛藤を演じ、その隙間にいろいろなかたちで暴力が入り込んできます。絶望的な反抗が暴力になったり、社会的な規制が暴力になったりします。暴力は、社会的存在としての私たちと個的存在としての私たちを橋渡しする役割を担っている一つの仕掛けなのです⁵⁵。

⁵⁵ 人間の社会性と個性性の橋渡しの役を担っているとされるのは、普通は、言語的理性ないし理性的対話といったものでしょう。禁忌の意識を取り除いて公平に見れば、暴力も、言語と同じように、人間が他者と関わって自らを表現する行為の一つなのです。